

30年を足掛りに21世紀へ

中山輝也*

私が、実社会へ出ました昭和35年頃は、資源関係への進路が閉ざされておりましたが、土木地質関係ではまさに黎明期でした。その為、駆け出しの地質屋であってもただ「地質」に関する知識があると言うだけで、土木屋からはそれなりの評価を受けて、「適切な助言」をおこなっていたように記憶しておりますが、今、想い出すと背筋が寒くなるようなこともあります。

2年ほど土木地質の会社で過ごし、新潟県庁に転職するや、当時の県のプロジェクトの地質を担当することになりました。外部発注などは殆どなくまさに直営重視の時代でしたが、丁度この時期は事業の端境期で少々閑をもてあまし気味でした。何しろ、かけだし公務員の悲しさです。民間とちがって、与えられた仕事のほかは、動きがとれず、唯々専門書を読んだり、同僚の土木屋と技術論議で過ごす日課でした。

そんなことをして過ごすうちに、一、二ヶ月が過ぎ、且つての会社の同僚達はどうしているだろうとか、技術の上で差がつくのではないかと、情報不足など少々あせりに似た気持ちをもつようになりました。新潟にもこの道での先輩や同僚が沢山いるはず。これらの人々が一緒になって何か出来ないかと思い、学生時代にもときどきお世話になっていた先輩の須田さん（現産業地質科学研究所事務局長）と二人で粗案を作り、同じ県庁の先輩である奥村さん（現国際航業新潟支店長）、農地部の岩永さん（現キタック常務）、商工労働部の米沢さん（現県河川開発課長）、土木部の伊藤さん（現県小千谷土木事務所小出分所長）に話し、この会の結成の賛同を得て、直ちに行動をおこしました。

当時は県庁企業振興課のなかに地質屋が一つの係を形成していましたので、もぐりで事務局を設置して載きました。新潟大学でも、西田先生（故人）、津田先生（前学長）、今井先生（現早稲田大教授）、茅原先生（新潟大学名誉教授）、民間では橋本さん（日さく社長）、松山さん（日さく取締役）、小宮さん（現新協顧問）、それに早川さん、池田さん（興和取締役）が何かと相談にのったり、アドバイスをして下さいました。

昭和37年の3月、西大畑町にあった当時の理学部（木造の旧制高校）の教室で、設立総会が開かれ、会則を採択し、西田先生を会長に選出し、第一回例会を開きました。たしか会員は40人くらいでしたが、それでも出席者は30人くらいだったと記憶しております。新潟応用地質研究会の誕生です。「応用地質」でこれだけの人々が新潟で一堂に会したのははじめてです。東京には、現在の日本応用地質学会の前身である応用地質研究会がすでにありましたが、地方では私共よりいくぶん前に誕生した北海道につづき二番目でした。その後、各県に同じような研究会が発足したと聞いておりますが、当時としてはきわめてユニークな存在でした。東京の支部にならないかなどとの話もありましたが自主路線ということで自然消滅となりました。

その後、青木先生（新大教授）が当地へ赴任され、その頃から当地での応用地質の分野への若手の進出がめざましく、さらには仕事仲間の土木屋も次第に理解をしめし、会員数はさほど時間をかけずに100名を越えました。3月、9月に例会が開かれ、教育学部（現在の医技短大）の教室を白井先生（新大教授）

* ㈱キタック代表取締役社長、評議員

のお世話で利用し、閉会後は古町十字路の「越路」、且つて、旭町にありました「旭水寮」などが懇親会の会場となりました。

その後、20歳代から30歳代の若手技術者も中堅となり、当時の高度成長期という特殊事情の中で官民ともに、時間的余裕がないことや、幹事の交代と引継ぎがうまくゆかないことなどから、一時期若干の中断もありましたが、昭和60年の秋だったと思いますが、池田先生（長岡技大名誉教授）から、私共に再発足させるべきとお話があり、翌年春、イタリア軒で且つての幹事、若手のリーダーに集って戴き現在の姿にすることができました。池田前会長、小川会長（長岡技大教授）の御努力は勿論ですが、こころばかりの幹事会メンバーの企画力・行動力が会を発展させた功績は大きいと思います。前幹事長の石橋さん（現県六日町土木事務所次長）、現幹事長の山岸さん（現県漁港課長）が発揮した指導力、統率力で現在のものもとても充実した会に育てあげたものと確信しております。

これからは、30年の実績で示されているように、さらに地道な会に仕上げるべきだと思います。この地域の地質の特殊性を考慮した地質情報蒐集、特殊地盤の研究、ハザードマップなどを取り上げるのもよいでしょう。さらにはグローバル化、国際化時代において応用地質の立場で、研究し、貢献できる沢山のテーマがあります。

当地域を含めて、環日本海時代と言われる中で、広い意味での北東アジアに関して私共が専門とする分野で交流、協力することも可能でしょう。

まもなく21世紀、以上の事柄を含めて皆で努力してゆきたいと願っております。

（35号91.11 自稿より一部引用）